



教養原論におけるビデオ学習の効果と問題点(2) : 神戸大学の研究(その3)

山内, 乾史

(Citation)

大學教育研究, 07:43-52

(Issue Date)

1999-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81004640>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004640>



教養原論におけるビデオ学習の効果と問題点（２）

－神戸大学の研究（その３）－

山内乾史（神戸大学大学教育研究センター助教授）

序

前稿では、平成９年度前期・後期における、私の担当した教養原論「発達と教育」でのビデオ学習の効果と問題点について、平成９年度後期、つまり少人数授業の方面から論じた。本稿では、平成９年度前期、つまり多人数授業の方面から論じてみたい。前稿でも述べたように、平成９年度前期の場合は、比較的授業時数に余裕があったので、講義の最終回に『白い巨塔』に関する感想とあわせて、授業全体に関する感想を書かせてみた。そこに出てくる感想には、実に様々な種類があった。ここでは便宜上、学部・学科を中心として、類別した上で、論じることとしたい。

ただ一言、具体的な分析にはいる前に、平成９年度前期の授業全般の特徴について述べておきたい。前稿でも若干触れたが、平成９年度前期の授業は400人の受講生を抱える多人数授業であった。前稿の表１に示したとおり、これまでの授業では70人弱の規模だったので、当初大いに戸惑いを覚えた。しかし、基本的な内容を変更することはせずに、とりあえず、前年通りの内容で、方法もマイクを使ってしゃべるという以外は何も代わり映えのしない授業を当初行っていた。ただ、前稿でも述べたように、同僚の米谷淳助教授にビデオ撮影をしてもらい、授業終了後ビデオを見ながら研究会を行う過程で、教室後方の学生の受講態度がはなはだ悪いことに気がついた。私語は比較的少なかったのだが、漫画を読みふけるなど、明らかに出席点稼ぎのためだけに出席している者が目についた。そこで、一度だけ嚴重に注意をし、ある程度の効果をあげた。その内、アンケートを採ったり、個別に学生に授業の感想を聞く機会があり、意外なことに気がついた。というのは、次の通りである。私のクラス・マネージメントは極めて稚拙で、学生の抑えが効かず、少ないとはいえ私語はあるし、マイクを使っているとはいえ声は小さいし、あまり注意もしないという、「ダメ教師」的な自己イメージを持っていた。ところが、学生によれば、私は教師としてかなり厳格で、声もかなり大きく、私語を厳しく取り締まり、その結果、私語の極めて少ない授業であるが、かなりの緊張を強いられるという、予想外の意見がほとんどだった。自分で言うのものはばかれるが、授業に対する評価も、決して低くはなかった。私は自分に自信を持ったというよりも、私のやっている程度の授業がそんな風に評価されるのであれば、全学的に見て（個別的にはではない）やはり教養原論はプロブレマティックな存在であると思ってしまった。逆に、私程度あるいはそれよりやや上の程度の授業をすることなど誰でも可能なのであり、授業改善の必要性和可能性を強く感じてしまった。

さて、多人数教育にあたって最も困った問題は、プリント作成の問題である。私は教科書と自製のプリントを併用することにしていたが、プリントは１回あたり少なくとも３枚、多ければ８枚にもなる。400人分用意するとなると、1200枚から3200枚にもなり、複写の手間が大変である。しかも全員が毎回出席するわけではない。特に多人数授業の場合、出席者数の読みが難しく、回によって大きくぶれることが多い。その結果、人数分近く用意せざるを得なくなる。これでは、資源の無駄遣いにもつながるし、事務的なサポート・スタッフが潤沢ではない私どものセンターでは、教材の準備は自分でやることになっており、大変な手間である。

そこで、米谷助教授が一計を案じ、教員の授業用ホーム・ページを開設して、そこに教材をのせて、誰でも必要に応じて打ち出せる体制を敷いた。これならば、資源の無駄遣いはないし、欠席者も教材を容易に入手できると思われた。ところが、後になって判明したのだが、入学したばかりの1年生が多い授業だったこともあり、ホーム・ページという言葉さえ知らない者や、知っていても扱いに習熟していない者、あるいはアクセスする端末が身近にない者が予想を遙かに超えて存在しており、この方法は十分ではないと悟った。

こういう場合には、通常の教員はテキストを買わせることによって問題を解決しようとするだろう。ところが、教科書を使う場合、いくつかの問題があることは周知の通りである。第一に、他人が書いた教科書を使用する場合、その難易度、章立てが自分の授業にあっていない場合が多い。さらに、私の専門とする社会学や教育社会学の場合には、教科書が概して難しすぎるという別の問題がある。これらの教科書は、社会学や教育社会学を専攻しようとする学生の入門書として書かれたものが多く、私が受け持つ教養原論のように「非専門」の学生を対象とする授業には不向きである。平成9年度前期の場合には、自分も加わって企画した教科書を使った。その教科書は11章からなっており、私はそのうちの1つの章を担当した。自分が企画に加わった教科書であるから、使いやすいはずであろうが、なかなかそう簡単には行かないことが分かった。というのは、複数の人間で執筆する場合、それぞれ自分がその教科書を使って、授業をすることを想定しているので、綿密に打ち合わせをしていますが、自分の勤務校の学生・授業に合わせがちである。したがって、執筆者の勤務校の学生の学力に開きがあれば、教科書の焦点は些かぼけてしまう。しかも、専門の学生を対象にする者も、そうでない者も執筆しているので、難易度にも少々ばらつきが出る。自然科学では事情は多少異なろうが、人文科学や社会科学においては絶対的な教科書など求め得ないのである。

このような経緯を経て、最も効果的に教授する方法は授業目的にあったビデオを有効に活用することであると思いついたのである。

平成9年度前期における学生の反応

学生の反応には、いくつかのパターンがある。それを順次あげながら、分析していきたい。aが白い巨塔についての感想、bが授業全般についての感想、＜私のコメント＞はこの感想に対する山内の見解である。

①授業を全く聞いていないタイプについて

このタイプには、正直がっかりさせられる。この手の感想からは何も得るものがないし、おそらくこれまでの授業もきちんと聞いてくれていなかったのか、と思うと、その理由はどうあれ、情けない思いにかられる。

（事例1：法学部5年生男子）

aフジテレビの番組なのに珍しく興味深いドラマをつくったと思う。昔のフジテレビはいいものをつくっていたと思う。

b変に出席をとったり、小テストをするからたいして真面目に授業を受けない人がやたらと来て、真面目に受けようと思っている人たちが座れなくなってしまう。非常に環境が悪かった。（法・5年男子）

＜私のコメント＞授業で見た『白い巨塔』はフジテレビの番組ではなく大映の映画である。そのことは授業の中で再三述べた。いや、その事実の如何にかかわらず、こんなことを授業の感想に書くこと自体が問題である。本人は「真面目に受けようと思っている人たち」の一人のつもりだろうが、この空疎な感想からは「真面目に授業を受けない人」としか思えない。これほどの的外れなコメントは珍しい。この学生は私の授業にかなりこまめに出席していたようだが、半年間授業中に何をしていたのかと疑いたくなる。

（事例2：発達科学部4年男子）

aビデオを見て能力とはほぼ無関係な同じ大学出身者の教授を採用しようとする学閥が強いを感じた。僕自身は能力主義で採用するほうがのぞましいと思う。

b席数が少なかったので、全員座れるようにしてほしい。

<私のコメント>bの指摘は事実であり、そうあるべきだと思う。ところがaの指摘は、ビデオ鑑賞にあたって行った私の解説を全く聞いていなかったとしか思えないものである。というのは、財前五郎は非常に優れた腕の持ち主で、その実力については自他共に認めるからである。学閥がかかわる争いはそれを前提としているのであり、彼のいうほど「単純な反能力主義」ではない。

（事例3：農学部4年生男子）

a僕はすぐ正義感になってしまうきらいがあります。だからこの映画を見ると、現実はこちらの方であろうなと考え直すのです。お医者さんになる理由は”お金が大きく稼げる”というのが、今の人々の理由であるのではないのでしょうか。そうすると、やはり現実は僕が目から見ると、汚れたものでしょう。

bうっ、この後どういうことなんだ。と思うことしばしば。なぜ先生、語尾というよりも意見のしっぽの方をにごすのだ。良く考えれば、生徒自身で考えなさい、ということでもあります。こちらとしては、先生の意見が知りたい。そう思いました。がくれきについて考えたくあった時期だったので、非常におもしろかった。ここまで歴史と社会と絡んでしまったら、僕は受け入れるしかしかたがないのか。現実の重さに気づくキッカケでした。以降よりは、現気づける言葉を散りばめて、というのは甘えすぎですね。

<私のコメント>「医者＝金儲け」という単純かつ歪曲された偏見しかもてなかったとすれば、彼はこのビデオを見て何も理解しなかったに等しいことになる。というのは、この映画には数多くの医者が出演し、中には清貧をかこっている医者もいる。真面目にビデオを見て、なおかつ「医者＝金儲けに走る＝汚い」などという図式しか読みとれなかったとしたら、私の説明が不足であったか、彼の理解力に問題があるかである。

以上の3つの事例は、いずれも出席状況は大変良好な学生のものである。したがって、私の授業で展開している話はほぼ聞いていることになる。私は医学部医学科・保健学科の1年生（前期の授業であるから高校出たての者がかなりいることになる）が十分に理解できるように内容を精選し、難解なものには解説を加えたつもりであるが、上述のような感想に出会うと自分の説明の仕方がまずかったのかどうか検討し直さねばならないと思う。

②医学部医学科の学生の反応について

医学部医学科の学生はさすがに、ビデオで扱われている内容が自分の将来に密着したものであるだけに、批判するにせよ同調するにせよ、かなり真剣にビデオを見、深い洞察を加えている者が多い。

（事例4：医学部医学科2年女子）

a大阪大学医学部の教員の出身校名簿を見たことがある。ほとんどが阪大出身者で占められ、しかも男性で占められていた。『白い巨塔』の教授選を見て、昔も今もそう大して変化がないと感じる。研究内容も決して評価されないわけではないが、同じ研究成果をあげている二者を比較するならば、同校出身者を推す方が、自らの地位を安定したものにすることができる。結局、人間も動物と同じく、仲間意識が強く、それが壊れることを恐れるのだと思う。

b学歴社会の成立の過程を知り、自分が組み込まれている学歴社会という者について考える機会を得ることができて非常に良かったと思う。

<私のコメント>事例2と比べれば、こちらの洞察の方が深いことは一目瞭然である。もっとも、私の『白い巨塔』観は、彼女のそれとはかなり異なるが、基本的なポイントを押さえている点は評価され得る。逆に言えば、上述の④の3つの事例は、論評以前の実事認識のレベルですでに問題があるのだ。

(事例5：医学部医学科2年男子)

a医学部教授選が大変激しいということがわかりました。学閥の争いというのを大きくとりあげていて、現在でもあれほどではないだろうが、多少残っていることを聞いたりします。学歴社会が明治からスタートしたが、その悪い面というか硬直化してきた姿というものをあの映画から読み取れました。最後の誤診の件でも結局、大学の権威が正しい裁き（かどうか分かりませんが）を押しつぶしてしまうという状態までいくという社会全体の矛盾へもつながる感じがしました。私は里見助教授の意志のつらぬき通し方に感動しました。

b自分自身が神大生ということで周りから、学歴を持った人物であるとみられている。結局、学歴社会にのった人間ではあるのだが、学歴社会自体が悪いわけではなく、何か画一化して、落ち着いて硬直化してきた社会による学歴社会の固定化に問題があるのだということがわかりました。現在の学歴社会が形成されていく過程というものがおおよそ把握できました。これからどういう風にな変わっていくのか、というようなこともあれば、よりよかったと思います。

<私のコメント>授業のポイント、ビデオ視聴の意味を的確に押さえている適例である。

(事例6：医学部医学科2年男子)

a自分の属する医学部において、あそこまで凄まじい争いがあるのを見てイヤになった。（ただ、昔の話だから、今は緩和されているかもしれないが…）。学閥争いに無関係で、ただ治療に専念する医師でありたいと感じた。権力欲の強いやつは、政治家にでもなったら良いと思う。医事裁判に関しては、自分でも過ちを犯す可能性があるだけに、こわく感じた。米国などでは医療訴訟が急増しているから、これからは慎重な医療を心がけなければならないが、慎重な医療と消極的な医療は異なる。自らの勉強のみが頼みの綱と思った。この映画の中では医学界が団結して真実をもみ消したが、真実を明らかにするのが、人としての義務であることは云うまでもない。

b普段深く考えても「どうしようもない」と思っていた学歴社会について考える機会が得られた。結論は、学歴社会の存在を受け入れ、その長所をのぼすということだったが、果たしてそんな事は可能だろうか？人間は人を差別することが好きだから、簡単なやり方ではこの問題は解決しないと思う。授業のやり方としては良かったのですが、先生が「評価方法」にこだわりすぎている点に世俗的なものを感じます（俺達にとっては情報が多い方が楽だから本当は嬉しいんですけど）。あと教室がせまくて、暑くて大変だった。いつも一限の講義が長引いたりして、2回ぐらいしかすわれなかった。もっと何とかしてください。

<私のコメント>読むべきところの多いコメントである。一言だけbのコメントに言及しておく、受講生の中に医学部医学科・保健学科の1年生が相当数おり、彼ら／彼女らは高校出たてで大学の授業になれていないと思ったため、やや「評価方法」について諄く説明したきらいがあった。ここ3年ほど担当している後期の授業では、やはり1年生を持っていたのだが、後期ということもあって、あまり説明していない。すこし諄いという意見がある一方で、これぐらいやってくれてちょうどいいという意見もあり（もっと丁寧にやってくれという意見はなかった）、受講生の層と時期を見て臨機応変に変えて行かねばならないだろう。教室の問題は深刻であった。400人の受講生に対して300人弱の教室が用意されていたのだが、出欠をまめにするため、いつも立ち見の者があふれかえる状況であった。しかも、前期も夏場にさしかかると、暑いことこの上なく、ビデオ講義の時は暗幕を占めるので蒸し風呂のようであった。教室の問題は、様々な方面から様々な要望の出ている問題である。クラス・サイズと開講数、受講制限の可否など、システムの問題として考えると同時に、教員個々のレベルで効果的な環境設定を同時に考えていかねばならないと感じた。平成9年度前期の受講生の感想では教室の問題に対する苦情が多く、私自身環境設定がうまく行かなかったと反省している。

医学部医学科の学生の中には『白い巨塔』の原作をすでに読破していた者も結構いたが、映画をみたという者はいなかった（ドラマも見た者はいなかった）。原作を読んだ者のビデオに対する感想は、「迫力がある」という賞賛もあれば、「筋が荒くかなりカットされている」という不満もあった。教員の私としては、原作を読んでいる学生がほとんどであろうと予想しており、実際に医学部医学科以外ではそうであったが、医学部医学科ではさすがに三分の一ほどが原作を読んでいた。今後の授業の進め方・解説にこの点をもう少し考慮していく必要がある。

さて、医学部医学科の学生の中にも、洞察力に著しく欠ける（あるいは真面目に見ていなかった）者も若干いる。そういった事例を1つだけあげておこう。

（事例7：医学部医学科1年男子）

a学閥の激しさについて聞いた後だからかもしれないが、なんか、たいして争いがないような気がする。いまいち、たいした学閥争いがないような。権力を手に入れるためなら、主義主張を無視する政治家の方がはるかにおもしろい。

b新しい教育がうまれつつあるので、そのことにも目をむけてほしかった。例えば、大学に高校生が入るという（正確な名前などは忘れた）。戦後、続く6・3・3制に穴をあけるという意味で。でも時間的に苦しいか…。

<私のコメント>記録によれば、この学生は私の授業には皆勤したことになる。しかし、150近い医学部医学科の学生の感想の中で、私の見たところ、これは最低の感想の一つである。というのは、権力闘争の激しさを理解させるために、このビデオを見せたのではなく、大学のメカニズム、人事を巡る駆け引き、そこに働く力学、そしてそこで学閥の果たす役割などを理解させようとしていたからである。「政治家の方がはるかにおもしろい」などとは、的外れもいいところである。

医学部医学科の学生の中には、「自分の将来入っていく世界は、あんなに汚い世界なのか」と相当ショックを受けた者も少なからずいたようである。このビデオを視聴させるにあたって、これは些か誇張されているということを強調したつもりだったが、不十分だったようだ。医学部の世界のダーティーさを見せつけるとか、将来に不安を抱かせるとかいうことは、ビデオを視聴させる目的とは全く関係ない。この点にかなりの反省を加え、平成9年度後期の授業では、十分に解説を加え、目的について周知徹底した。そのため、やや時間不足にはなったが、前稿で掲げた感想にみるように、1つを除いて、ショックや不安を訴えるものはなかった。

③医学部保健学科の学生の反応について

医学部保健学科の学生は1人を除いて、すべて1年生であり、したがって、つい先日まで高校生だった学生ばかりである。したがって、できるだけ、易しいレベルから授業を開始し、またできるだけ戸惑わないように、オリエンタリングをしっかりと行ったつもりであった。

（事例8：医学部保健学科1年女子）

a本来、医者がすべき仕事を怠り、教授になることばかりを考え、とても汚い世界だと思いました。大学病院は、待ち時間が非常に長く、診察時間が短く、おまけに学閥まであるので、もしかしたら、将来私がそこで働く可能性があるかもしれないと考えとぞっとしました。映画に出てきた里見助教授のような人の能力がもっと生かせる病院になってほしいと思いました。財前助教授も、初めはあんな自信過剰で、患者の命をおろそかにするような人ではなかったのだと思うけれども、学会とか研究とかで、だんだん流されていって、そんな風になってしまったのだと思う。病院とは本来どういう事をする場所なのかを考え直してほしいと思いました。

b今の学歴社会について、いろいろ考えさせられたし、映画も見られたのでためになったと思います。

<私のコメント>標準的な感想である。

(事例9：医学部保健学科1年女子)

a映画が製作された年代や原作の年代はかなり昔のものだろうが、今でもかなり残っていると思う。医学科を受験する友人が、神戸大は駄目だね、と言っていた事がある。彼曰く、近畿圏には、京大、阪大の派閥があり、西の方には岡山大の派閥があるので、神戸大では不利という事だった。国家試験を受けた後、2年間は研修医として大学の医局に入り、色々な病院に派遣される。地方大学の医学部出身者は”良くない”病院に回されるといった差別もあるそうだ。医者の世界でも、どの大学出身かで、差別化される。『白い巨塔』で感じた事は、大学の上層部は解放されていないのだということ。

b学歴というものについて改めて考えさせられた。私もいい高校を出て、神戸大に入ったのだから、学歴社会の恩恵を受ける側になるのだろう。社会はゆっくりとだが、変化してゆくので、自分の子供が私たちぐらいになったときどうしてるんだろう。

<私のコメント>これも標準的・典型的な反応である。

(事例10：医学部保健学科1年女子)

a私の父が小さい時から私に医者になるよう勧めていて、白い巨塔の話をよくしていたので、一度見てみたいとずっと思っていました。この映画を見ている最中、私は無意識的に財前を応援していました。そのことをあとからずっと考えていて、やっぱり、私は学歴社会に溺れているな、と思いました。おそらく高校1、2年の時この映画を見ていたら、里見さんの方を応援していたと思います。高校もトップ校で、先生達が、この高校はすごい、君たちは偉い、と教え、大学でも神戸大学という一応社会で認められたい大学に入り、きわめつけは、私の父が徹底的な学歴社会人間だということだと思います。父は大学が中堅大学で、社会で色々苦勞をしてきて、私に学歴が全てだ！という感じで、必死で教育してきたので、やっぱり私の考え方には傲慢なところがあるようです。でもこれは、私に限ったことではなくて、神大や阪大、京大などに行った人はやっぱり何らかのエリート意識を知らず知らず、もってしまっていると思います。近所の人、親戚の人、色々な人にすごいねー、と言われると、、そうか、と思ってしまうと思います。

bこの授業は、わかりやすく、すごく面白かったです。白い巨塔のビデオを見るのはすごく良かったです。先生が中立的な立場から授業をしてくれたので、自分の考え方に偏りを持たず、素直に聞けたのでよかったと思います。

<私のコメント>財前の生き方には色々な評価があってしかるべきで、里見＝善、財前＝悪というステロタイプの図式ですべてを見ることは危険である。この学生の受け取り方は私のそれとは全く異なるが、しかし、こういう受け取り方もあって良い。

(事例11：医学部保健学科1年女子)

a映画だから、少し大げさにしてあると思って見ていた。けれども、後で、本当にああいう現状なのではないかと思い始めた。誰もが、自分の大学の名誉を叫び、学閥、伝統を重んじたがるように見えて、実は自分本位なのではないかと思った。選挙も裁判も、一体何が権力を持っていたか、といえば、金である気がした。また、教授と助教授では、すごい違いなのだと驚いた。学閥を重視するなら、もっと教授と助教授の関係が密であっても良いと思った。

b神戸大学を選んで入学してきた自分は、もう既に学歴社会に入っていると思った。学歴社会という響きは、あまり自分には良く聞こえない。それなのに、どうして、この社会に入ってきたかという、たぶん世間の流れにのってきただけ、か、あるいは、そうしないと生きていくのが難しいからだと思う。(就職とか)でも、昔は身分社会だったということを知った時、それも嫌だと思った。能力社会の学歴社会の方が、平等だとは思っただけ

ど、今は、能力主義は消えて、学歴の方だけが残ってしまったのだと思う。自分たちのいる社会を解明したという感じだった。

<私のコメント>よくありがちな感想に、学歴社会が反能力主義であるかのような受け止め方をしたものがある。しかし、これは明らかに間違いで、授業でも繰り返し強調してきたところである。にもかかわらず、こういう感想が多くなるのは、一つには学生の思いこみがあまりにも強いということはあげられよう。だが、それを突き崩し、揺さぶることを、この授業は目的としているのだから、私の説明不足、あるいは技量不足である。

医学部保健学科の学生には女子が多く、出席率もかなり高かった。また、成績もかなりよかったことは間違いない。ひところよく言われた「五月病」など無縁で、非常に熱心に授業に参加していた。ただ、受験あるいは学歴社会というものを、冷静に、突き放してみるようになるには、高校卒業直後のこの時期にはまだ無理で、もう少し時間がかかるようである。私の授業の仕方は一種のショック療法ではあるが、もっと検討の余地があるのではないかとも思った。

④理学部・農学部の学生の反応について

この授業は、理学部・農学部・発達科学部（理系）の学生も対象となっている。発達科学部（理系）の学生は僅少なので省略し、理学部や農学部の学生の場合を取り上げる。彼ら／彼女らの場合には、自分の世界とはやや異なる世界が対象であるし、また2年生と3年生が中心であるので、やや異なる反応が見られる。

（事例12：理学部3年生男子）

a僕は、全くこのような医学部内の教授選について知らなかったもので、はっきり言って驚いたの一言だ。そして、今日、講義でいただいた純血率の資料を見て、また驚いた。学歴社会っていったい何？と考えさせられた。「人間の命」を取り扱う医者なのだから、裁判であったように、一人の人間として、行動、言動すべきだと思う。医者という地位の高さゆえに、ここの所をきちんとしておかないと、とんでもないことになるだろう。

bとても親切的な授業だった。今まであまり興味を持っていなかった内容であったが、講義を受けて興味をもてた。理学部からいつもこの講義を受けに来ているので、毎回座れなくて、とてもしんどかった。

<私のコメント>医学部以外の学生では、ショックの代わりに驚きが来る者が多かったようだ。座席の問題は多くの学生から苦情があり、私も大変苦慮した。

（事例13：農学部3年女子）

a昔の映画であったけれど、今でも、映画のような状況が根強く残っていると思う。本日配布された出身大学ランキングからもそれが見受けられる。白い巨塔をバックに大学を事実上、追い出された助教授が去っていく姿がとても印象的であった。医療への熱意から成る学閥批判により、大学を追われた助教授の姿が大学に根づく深い問題を提起しているように見え、色々と考えさせられるものがあった。

b私は、高校時代の頃から学歴社会に強い疑問を感じるようになった。どうして親や学校は自分の学力以外の面で自分に自信を持てるように、個性を引き伸ばせるように、導いてくれなかったのだろうと思った。この講義を受けて結局反発を感じながらも、周りの雰囲気にならうことなく、社会的に評判のよい大学に入学して、安心感を得ている自分に改めて気づいた。就職の際に、学歴にこだわらず、個人として認めてほしい。そのような社会になってほしい。教育の面でも、1人の人間として、自信のもてるような、個性をアピールできる場を増やすような土台をつくってほしいと願う自分がいる反面、学歴社会の波に乗っている自分の存在に矛盾を感じる。でも、私の将来の子どもには、このような社会の中で育ってほしくないと思う。私たち1人1人の人間に対する評価、価値観をそれぞれ見つめ直した方が良いと思う。

<私のコメント>感想の中身に対する評価は別として、この授業を半年間受けて、自分の歩んできた道を振り返り、同時に将来の教育・社会について考える契機を与えられれば、この授業は成功であるという観点からは、このようなコメントが出てくるとほっとする。

(事例14：農学部3年女子)

a上層部の権力争い、これはどこの世界にもあることだろう。それが名誉ある国立大学の医学部であっても同じであろう。しかし、人間の感情として医者という人の命をあずかる立場にある人間が、そのようなみにくい争いをしているという事実は非常に残念だ。なぜそれほどまで、肩書きが欲しいのか、今の私にはいまいち理解しがたい。地位とか富とか目の前にすると、人間はつい欲望を丸出しにしてしまう。頭のいい(勉強のできる)人間はなおさらそうになってしまうのだろうか。悲しい事実だなあ。

b学歴社会という言葉に常々疑問を感じながらも、自分も結局はそんな社会のイメージに固執してきた。つまり、いい大学をでていれば、イコール頭のよい人というように。そして、自分も神戸大学という、世間でいえば割とみとめられた大学に入ったことで、ある程度優越感を得ていた。考えてみれば、本当におかしな話だ、18歳の入試の運で、これからの世間体が決まるとは。人間の真の価値が学歴で決まるはずがない。あらためて、教育そして大学のあり方について考えさせられた。真の意味で、立派な大人になりたいと思う。

<私のコメント>事例13に対するコメントと同じである。

(事例15：理学部2年男子)

a浪速大学は、浪速大学出身のものをおしていたが、結構昔の映画なので、現在はどうかと思った。しかし、阪大の臨床系教員の純血率が100%であることを知って、このような伝統はこれからも崩れないと感じた。

b僕は、学歴というものが、僕らの時代には、もうそれほど重要でなく、その人の人間性、社会性が問われると思っていた。しかし、まだまだ大学名などで企業などがその人を判断することもあると改めて知った。特に医学部の学閥の強さを知った。勉強はできなくても、ある分野では優れた能力・技術を持っている人が世の中には、たくさんいるはずだが、その意味では、最近高等学校に専門学科が増えてきたのはよいことだと思う。

<私のコメント>これも事例13に対するコメントと同じである。

以上、様々な典型的感想を見て、ビデオ学習の効果と授業全般に対する印象を探ってみた。これらの感想から分かることは、まず第一にビデオ教材の影響力の大きさである。この点に関しては、私の当初の予想を超えていた。散漫になりがちな多人数授業においても、ビデオ教材の使用は大きな影響力を持つことを確認できるわけである。しかし、忘れがちな第二の点は、それによって他の文書、テキスト、プリント等によって行った授業の印象が薄れがちだということである。例えば、授業中に再三注意を喚起し、述べたはずのことが、曖昧にしか覚えられてなかったり、あるいはすっかり忘れられていたりする。覚えられているのは、ビデオと関連づけられ得る部分であり、そうでない箇所は忘れられやすいようである。この意味でビデオ教材の使用は諸刃の刃である。

総括

色々な感想を読んでみて、私が行ってきた学歴社会をテーマとする「発達と教育」の授業は、その受験戦争をくぐり抜けてきたばかりの、「凱旋の兵士」に「君のやってきたことはこういうことだ(あるいは、この程度のことだ)」と突きつけるという、些かサディスティックな授業であったことに気づいた。しかし、同時に、自己の授業で大学全体を(個々の大学や神戸大学を、ではない)批判的に検証するという作業も行ったため、マゾヒスティックな要素も持ち合わせているだろう。社会学や教育社会学に限らず、人文科学や社会科学では、自らの住む社会、学生の住む社会に切り込んでいく場合に、サディスティック、あるいはマゾヒスティックな視点が必

要とされるのは当然のことと言える。高校までの授業は、自分とは別の所に論じる対象があったのが、今や自分を含む世界に対象が向くのである。その世界を攻めることは、自らを攻めることであり、その世界を守ることは自己弁護へとつながる。教養原論の1つの科目として、そういった新しい視点からの授業を行うことは、学生に「大学の授業はどういうものであるのか」を理解させる上で効果的だと思っていたが、感想を見る限り、その効果はある面では過剰であり、ある面では過小である。この点は何よりも私自身の反省を必要とする点である。

ところで、この過剰と過小のコントラストが何によって惹起されたかといえば、それは言うまでもなく、ビデオ教材によってである。目で見える教科書とのインパクトの差によってである。この差は授業者の予想をはるかに上回る形であらわれた。インパクトの強烈さは、そのことに関して記憶を定着させるが、他のことに関して印象を薄めかねない。感想文の中からそういった印象を実際に受けてしまった。これは、ひとえに、授業計画やその他の点で、私の至らぬ点があったためである。ただ、この点において、平成9年度後期にはかなりの改善を加え、実際に、学生の感想から見る限り、かなり改善されたようではある。しかし、これが少人数化の故なのか、私の授業技術が些か向上した故なのかは、再度多人数授業に挑まねばわからない。

ビデオ教材の使用は、多人数授業の場合、大いに有効であり、しかも他の方法を持って代えがたい。しかし、その目的、授業全体の組立をしっかりと練り上げて使うのでなければ、上述のような理由から、効果的ではないばかりでなく、有害でさえあろう。視覚的理解を助ける、記憶への定着を図る、あるいは印象づける、あるいは関心を喚起して自己学習を促す、など多くの目的がビデオ教材の使用に含まれるだろう。しかし、ビデオ教材の使用は教員の授業を省エネ化するための、手拔きの道具としてあるのではない。効果的であるということは、楽をできるということではない。教材の精選、周到な前口上、観賞後のまとめ方など数多くの点で、ビデオを使わない授業と比べてより一層の、別の工夫が必要である。しかし、その工夫をうまくできる場合には、ビデオ教材の使用は、多人数授業において散漫になりがちな授業の内容を魅力あるものにし、学生の理解を助け、授業者の友となるであろう。極めて平凡な結論ではあるが、周到な授業計画が以前にまして必要とされ、それと同時に授業者の上述のような点での力量の向上がますます不可欠とされるようになっていないのか。（以上）

The Effectiveness and Problems about Using Audio-Visual Materials(2):A Study on Kobe University(3)

YAMANOUCHI,Kenshi(Associate Professor, R.I.H.E., Kobe University)

This is the second half of my paper. In this paper, I tried to examine how effective using audio-visual materials in the class with great many attendants is and to examine the problems with this. In the first half of my paper, I examined the effectiveness of using audio-visual materials in the class with 20 or more attendants. As a result of examination, I got the conclusions as follows:

(1) At first, the effectiveness of using audio-visual materials is more greater than I expected. Especially, in the case of the class with many attendants, this should be one of the most effective methods which enable the students to understand the contents of the class more easily.

(2) But there is an serious ploblem. That is, using such a kind of materials without minute plan and adequate teaching method may give them biased impression or information about the class. The contents of classes which are concerned about these materials are well memorized, but the others are less memorized and sometimes omitted. To solve this ploblem, more adequate teaching method and the knowledege about teaching will be needed.